龜尾集

乾

911.3
カ
乾

故友堀鷹の英名ハ海内に響き吾此道に同志の
人ミなミな知る所にして梓業代にも伝ふるを待りしかれ
を慕ふ人もや高弟幹雄子しかも游窓に晩路
其業に移りて不去庵と号し居を久しくすに
響ゆめん意なる庵此新室の披露にとて一冊を
編集して標題を以てハ梅花と南座を翻せ其の
名亭以佛佳木中を笑をいめと以へとしおハ晩気路
に居をト寄長く住む家の以響みてなき無

かめ代とは志やと名付たるハ祝酒の酵の捨しに
に迄りし我ハ誹諧にて多くの毛見に寄らさりけり
予ハ其悦ひより風雅に富る我ハ只先師の霊為我
跡を継て生涯の此道を世に進めし芳名を四方に
かゝやかさんと此悦為我其日を祝ん

蒙夜起之丑年八月

等栽

新年自賀

去年を年と観あゆや　望付ら　之牛雄

宝を設けし杓把の柔試む　秀奇

まのつらら枝を中まで去風月　以水

御来うちの舟うつるん　明水

月の出をや見よまで　枕中去らで　立雀

去年より経る中の空遠く　柳賀

右一順　表合

雲雀尾と千代の亀鶴に結ひ

柳まてらのゆきあしき枝を

長春

蓮葉の露ころり中の一滴肉　文ゝ

梅の立て色の香維や人あまり　等載

鶯ころや梅にも紛く色は月白　見外

雲雀尾の新枝にかゝる薫車

かすかにらすまて

佐保姫の笑ふ面もかくはかり宝明り　高山

雲雀尾めしの稲宅に業を依

人業にかゝるを迎ひもとる

翠柳もあれし結柳しきりなれ　洒旋

亀鶴年の新居まつしかる

春の人亀にまかやころ挿華那　半湖

花咲て菊もいき亀の垣　武士シ 寄之

あらたなる引やそのえあやめ草　布崖

思ひあまり聞へたる風代　弘湖

鶯の声よ小禽も垣ねの寄　香吹

入かゝる土筆の一時の香神　可之

柳にも今や置ぬる雪あはれ　雲和

山里人の宿の取りなき新島　入家

若竹の新芽引紫庵の窓　梅田

梅ひらく中に芳しやなまれ　竹外

春まつ事のきたなりの住拈代　玉崔

若草に伏見の出来し庵の先　乙旋

梅さいて咲く菜の花まれ　市流

ひとはきの柳見ゆるやもみぢ　弘英

鶯や松をとつぐ春の色　山星

子梅かねて梅見も旭の神　茂滴

ゆるしの車の通りまれ　保清

春雨の山里の声あかし布　奏奇

茶呑草のゆかしき住拈筆雑　汐水

咲はの声れて行くさ見えて那　　敲て

鳥ちや雪ゐのもろきた尾の声　　明水

鳥啼ちらる谷なる枝を行ふ
海飛ぶ鳥をさそふ風や夜の月　　下廿 楽只

流るゝや汐干の末ハ松の芹　　古蔓め

花の世を流よそふし柳哉　　象雄め

手もや飛月の移るや春の水　　柳老

かし床人とまる行すまされぬ　　京 蒼笛

くる秋と夜風の露や草の夜　　芹舎

遊ひ来て人をまつ也綿の花　　杏甫

何雲のこゝろたゝる也松の梢　　蒼山

語るのかくれゆき露也粟の花　　自在

芳しや何處へ行く文の人々　　拾山

蝙蝠や光帰る夕ぐれ　　鳥岬

梅の香ら今年ハ咲えて萩の花　　碩水

猫の子や宗なけ乞食杖　富峯

水汲て月にぬらすや柳の芽　漁藻

漏雲の影よ高峰に遠き哉　時篁

降る雨の流れて四方の山の雪　色矢

人並に身ハ指ん庵の春　波川

旅寝ハ嬉や春けしき鳴の夏　玉池

岩鼻や沖の見ゆる磯や山里の桜　丸柱

静さの見えけて流れに春の月　柴魚

是見よと来ぬ命や春の桂　公栄

親の身に信する松すらん君が邦　十二八 東雄

町よ母や嫁る村さへ親の留　瀬水

生駒から残る衣よりふりし氣　古風

似て来て渡りまぬきる乙鳥の声　大年

此松や刈倒されぬかすみ哉　蘭藻

咲柳水に翠のうつれ春　松陽

肩すぼむ八門まて結ひる柳の花　牙右

啼雉子の声ひま似るすゝき野　イタミ 也卓

消え残る雪もまだらや峰の梅　近コ 醒也

咲捨て見すぎけり春や夜さくら　ヤマト 流宜

初みゝや都の花のさかり見に　キイ 素丘

梅の香も残る古地や杏の花　ハリマ 古谷

百々千々におつるのこゝろ寸萎麦菜　小梅

引よせて春も寒風の峰の雲　ヒンコ 梅臣

この道やこゝに登り蒼天帰雁　アキ 完山

耳にたつ木菟や夜は初ざくら　三車

田一枚植て子規梅柳　一悰?

ともかくも人の隠るゝ咲のやま　フンコ 豊山

住よしの暮るゝ梅の花も散鳥　石友

谷掛て道間ありや霧の中　未石

三州に春のこし春の都　ツシマ 琴古

家の人顔なつかしや出代り　アハシ 茄池

見る方へこゝろ寄せやられし梅の窓　竹翁

あゆむもよし雛子の迹了婦里　麦鴬

翔鳶の子都て去ぬ有明の影　松丈

はなれゆくおもはれたる橋の柳　芳桂

嶺けしや妙にかくれし梅の匂　新之

嬉帰や若葉の人れ菊見よ　友紀

押しるや小庭さるゝも月と梅　百鳥

花もまあるのぞきて一はゆ　守一春

我家のしられて気色の見ゆる出　星妹

賞子の声やと来ぬ秋の秋　きん之

蓮の花よそけてあきと焚燗　雅村

吹く風に月けちや雛子の声　鶏仁

嫁菜のおはなは何ともかも来　桃宜

行灯や汲降出して松の宿　宗雀

手にぬるや雪は春しきの色　学不

菜の花や綾利もの声て蘆刈船　半麦

里帰りや難波の橋にかきのつま　嵐字

戸の明て内ハ留守なり桃の花　一外

ゆかしさや備りの宿や寛まり　墦塚

弄ぶの児に戸さしけり浴り鳥　左一

咲花や兔ハ日の本国の香の花　庶六

瑠き雪の中よりつゝ藤の若葉　仙狗

水鳥の浮身よ其まゝ仰の月　鯉考

涼しさや理木の葉かげの海の水　松狸

散ぬれしと知る帰りあり小蝶かれ　素翁

蝙蝠の云子まゝ世中鼻の先　来田

白魚や今色の下に生船ぞ　元史

みしよの杖の跡ある走兔て小田の鴫　婦牛

月に行ぬるや若葉のうら表　松里

其さきや萩ちる浮て栗ハ何よの月　晩楽

捨てなき身の人知らる月の秋　煙外

分入ハ山と旅ゞ被落の秋　梢多

まよの風が吹ちらす花すゝき　柴桜

人数のまゝ乃ふて数ふまた気れ　涼哉

朝くもりかゝり夕程友となる何より　ときゝ守

消ゆ迄く〳〵る月取られ　雪外

雲の高や濤の取入て当申し　タンバ 澗瀞

菖蒲の色よ出花むぬ新樹れ　鑑水

粽よ人嶋新兎しふや掛の花　タンゴ 素丶柳

横笛よ小坂はしるや春の水　エチゼン 市孫

稲さらを色々さ原掛られや霜さひ　加賀 丹嶺

鶏の菜よ花のみりやかまつちて　大蓑

やつくさ侍は新や花の雫　照年

出る雲へよ新を取さん草れ　萬百

娘とえ入て石走流し夕紅の秋　柳壺

手よ白の巾まもるや寒さひ　越中 蓑笠

葉さくてや残色の夏を径れ　越後 鷲眺

黄の水し浸し汗ぬぐひ　清水

り花や色見えて風の竹　東拓

雪の振り払ひぬあふまれ　習静

戻りくる眼にうく紫苑　如晴

蔦かる人見えおろすや離の宮　積翠

西月宗匠すゞしき何ゆり六条　莽史

水鳥の岸まぎれぬ日和かな　禾雄

鳥の巣やぬけ出の見えぬ泉哉　雨猿

旅人はこれまで冬のちる時雨　雪渓

冬やまた一日の夕かな柴　文葉

春の水ぬるく人啼くや麦の中　吾東

蕪むく神の露やかゝる　崔園

出るや手は菜の花つまむ子の日哉　梅古

人は門は菜の月相かな　蓮宅

一風よ尾花の薪なし　雅佛

炭の地も春の柿　素郎

新らしき　古棠

手のちり積もきまゝに人の中　佐渡 谷守

黄鳥や世の動きなきありの侭や　西塢

庭前の地ならしの也てるの雲　笠家

似合しや万呆通る小まき原　斧刪

夕もえのくれて露の庵年　素笄

年よ経ハ空ぼうの梅りう色の玉　近江 乙也

鶴まさ耕し田ゆすも牡丹人てまちの春　九峰

宿の春を抱て雪く山や角力取　イカ 芸凧

大空らやきり旅さまなきなは　尾佐 両后

そりの枕のり燈さるのし枕もと　梅裡

寺の酒よ菖蒲の入てるまん茶　狗淑

清ふしと風の流てく氷の卵　家意

竹えや竹さきしまたる通りけり　不退

ゆふ照よ鳴てなまり初さくら　士芳

はつ若や見上まんなま花の木ちる　鈴水

梅白し寺に三月入るよふ那　静處

出るとしや雪まろけの影ふりそやり　墨岬

以松や見まうらもとも数やしまぬ　一清

二里まで東ゆ俵の雪や車牛　士前

よし切や音まし夜のはし打まり　蓬字

宿りて海づら見ゆるの月　参河 完伍

撞鐘や梅さく外れ山そのつり　去蕉

火燈りをよき風や庵の雪　遠江 嵐牛

雪何其の海をしつ見てゆるの宿　枯水

山川や花のつ草が見て来る　駿河 芳山

涼しさのあまりや川も鳴らそう　竹書

まつりしてらくの人数も鳴る葉の　素渓

見ゆし春の江にうらき人や此まで　甲斐 梨影

芳のありかた先手寺　さゝ

宝の出る葉のけふ日まけば那　香芸

あちこちに流れもや漢つて　文友

牢府の緑も二葉やなかまれ　湖球

あさ服をきせて通る若葉かな　吉莚

若鮎や風に追ふ水のおもて　竹哉

青柳の青みの中の河辺かな　保山

一夜ゝに月の[illegible]や橋の上　雲竹

葉の下の咲くや残りの花の色　雛莚

月よりも闇の香深し梅の花　硯水

桜咲けば雲や妻の花　玉泉

葉も若葉も木の若葉哉若葉の色　楽水

若草や海の上の曇りのひ　九江

松蝉の声すなる蝶の夢　芒月

のどかさや何ごとの娘手縁　桂水

松竹に松蝉もやまぬ小ぐもれ　蒲山

苗代や寺の家鴨の遊びあり　竹外

ちらちらと来て一むらや花の陰　美濃　山士

月影にあそぶ戻る[illegible]　清涼

同志は一つさしの山を戸越き　信濃 龍湖

鶴の毛もなしう落て時鳥ノ行　其猷

名八丈やその鯉の句吹く字　渭川

青柳や白帆見えて門の口　梅丘

十条の白きちうと打ひ寄る　希心

若桜日の精進すゝ御うり　裸来

蛸りや人を帯て眠うなる　不角

鶴風の宮以て去して又さくら　米芝

月落て鳥の都をさらに来けり　而足

初しぐれ寒入る宿の浅茅か程　渉吏

星ゝと鴉穴なす秋のくるゝ　秋菓

三日月や清河さしき下駄の音　以ば不

待宵や雛山をまれに草の帰る　嬌白

十夜念仏岩竹見えぬ也宇治の山　有信

杜若ひらきぬる時一の田の雑　秀麿

冬枯へて十夜まで浮きぬ一代　雲志

湧りまで立ぬ女子の日は雨ふられ　備萬
一筋しらむさるかし一雫　春朝
竹の子や見るまに入りて八伸て居る　冬来
まぎれ多年の松の音さらぬまぎれ　篤古
濡まる迄は来さかり　菜大根　以毛 心足
まだ白地見る人もある急ぎ哉　貞子
まるの山かへ多待まゐり右燈籠　栞里
見るより夕風寒き柳かな　一呂

日のさして寒き木の蓮柳　義平
梅うまのぬくゝ月初かな　谷詞
さゝめし尓雪の中に沈む除生来　霞堂
初春風に藤湯する堅川かな　文治
傷よりあつき子春清きしらむ来　鳥山
燕子袖を木に寒き花子べ　月叟
元るちつ見て庵の茶釜婦　幻亜
遠さのさらく人まえ菜子の庵　白交

蛙鳴中にさらはるゝ卯の花　つゝ美

まつ虫や宿も浅くは蝶よあふ　是則

七種や粥のはしらにかゝる　芝雄

ありし昔人ありきけり梅の中　一守

薄雪を見ぬ日は折る経十日　烏暁

萬より高のとまやひとし山　正通

暑き日は折々車の取く雛まで　木芝

維傑姫やゆきを取りたる五月雪　一孝

思はぬ石宵も散らる手風雲　梅柳

夢や我か心は日のえぬ床　如牛

烟しらを忘しるやなる手の風　香蘭

妙義まて

芝居らの月を来し　桂の都　呉羊

発りしき花文さらぬ柳　芋雄　牧雄

まさる水みぬ出来て種あらし　小笑

夕月のまうを照すや梅のうし　徐来

まてし果つるや弥生の月と雲　蓋國

雪とけるあつはしるや不二の山　素綱

ともしびに菜の花咲や佛の堂　至而

中の薮

何神の梅咲し椿さく岩の上　鶴雄

ちるのりかへなしつや夕柳　松洲

人心さまてもあさ芦にまかせ　寉路

八島の入口寒しかをきて後　一泉

柳にはかりさく桜計なき　一道

不二をうつる宮をはなて吹き代　露一

霞とねをおよ渡るや若葉の色　積翠

一声もかれや金字の花の菜　来古

梅さかす枝まハ咲まえし付婦人　文水

梅伐番に田水の澄や夕雛子　佳一

笑とりて見る花の雪の称　秀竹

なつしき端ハあきと古寒の花　風外改 倚公

世は山に紅葉のうつり見えて小六月　巴静

松葉を焚て冬もさらむ時雨哉　一静

冬の日は岩行ちるや滝の上　壺水

六月の松に人も住ふて涼し哉　宋宣

高音して道行日も阿る二月礼　乙瓢

明行や人はまだ起きりの声　以石

試のまゝにも来し楮種礼　漁友

大きらや紅葉よりさき花の色　志篇

宿木のさくらさかゆる松　蛙城

三節立春の麦やなかなか頃　蒲田

月見えて山の端遠し夜ゐの宿　文河

月はまだ涼む柳の木の間かな　嵐云

松たてん名は深山なるやもの中　一路

世やしきや捨るる我雲雀　下毛　未雪

海の音きこえて深き霞哉　鶉逆

木がらしの雪風深き六月哉　巣伏

筆のつゐ女も俳し出来て冬隣　以外

旅人に来ても解らや北紫乱　陸奥 清民

待つる宵まで来ぬ女たるの宵　庚蒸

元日の静さ梅に法り幸ず　壮山

乾鮭や家柱に道具をかけ初　精蕉

雛市や貴人ハ見人の十分一　常山

初午や赤気の外ハ遠出せり　雅鳥

雛ともり水もかるやたるの風　松園

青鷺の色好き形に眺る　葉之

風鈴をさげて夏出る也　六枕

古への寺の道中ハ芒茎　芦山

老ては鳥まで形やなまて乱　字石

夏の夜や咄をしぞとかる人の眠り　菜史

川船で走らせるはる小蜆乱　竹嶋

道やまき月日まで初まる　柳米

枇杷帥の蹈まかるや　梯月

風止

蝶の来て〳〵指るや稲の角　出之

菜の花よこ見るや竹の畠　去作

松て菜く船よ照えりけり子　路帆

菜の花うけり日の暮れ夕まかな　休翠

明やせ楽松伸より松の蕊　吉洲

針にひ日を染るなり茶の花　芳鳩

春風や吹きて醒の池　白之

寄りしよ一際なかれの花　一鶴

鶯や俄に来たるのちの山　千嘉

釣る人の来自ら稲の魚の道　一芳

鴉橋よ見えて小六月　詠柳

り秋や尾花の来まよ日の錦　柳志

鉢めぐる尚高花　松陽

六月や夏こ中る井の雲　李吟

多かりし出哉　一止

深や雅子の散る花　文人

一きはしろし月の梅　性丁

影なから見られけるの宿　其一

蓑笠のつきつくろふ取もの代　其溪

近隣来て橋の木切る笠の乳　鶴若

西日に振舞ひて早苗とるま　栗里

猿とたくみにをるやのりの砧　馬塚

明けから錢はけ動る青田哉　宗郷

虫の音を左右に漕行小舟哉　梅丸

冬子の出来を伺ふ白帆哉　吉室

漁舟の提手綱やなるの風　素楽

白角のあたり強う寒き哉　東波

書棒にまとの来なるや家代　ち山

生きなるやうに捌く青魚哉　抱珠

親子の日をうくうけて菊の花　塙径

夕暗や探山さへる雉子のこゑ　桂窓

蓑手籠るあとをとり見える蘇哉　一芝

名月や鳥もおきてゝ日の出さき　九浮

つくし〳〵侍宵の雲の神　龍山

晩る夜もさびしくなりにけり　佑高

川ぞひや東がしの芦が花　啓陸

中のよすがにありけり月　きん丸

夏の夜も蓮の葉ゆや水神の古　素山

さゝ浪やさら秋となりける池の上　一縄

一日の見ゆる浮きに柳の雉　何王

白魚や水をなれさて尚白し　梅外

秋の蝿角のむ日にも寄来し　茶館 蕙玉

落ちる木の葉も出のけてもみぢ　徐達

時しれの薪ふるふ朝顔かれ　松前 己有

山寺や園の鐘に日のあたる　旭

若竹の末しなの上　ロサン 湛山

羽根の蝶流れて来たる岸の蓮　一鼎

河海や昔くらべの灯籠　嗅山

ちらちらと乙来しハ出代　御風

葉むしの花まかる夏衣　赤山

続てハ雲白まくゆ米俵　嘯風

松の月よ一葉散れ芋畑の秋　白杏

竹湯く湯まこの虫わ夜なり　璞道

若葉して青々や春の海　春生

秋の月うまや錦浩光　定札

夏衣を押分て入る清水の神　碧水

おきし夕立あとの門田哉　桂纏

いそぎ来て家ありあとの末　西湖

祁彩や去年より人の浮なる　帒一

引潮の雲間やける中の松　風湖

花の名もよくきれいなる　雷山

散りの花やつましかまくら　金英

花ちれば見送峰の雲　陵山

一十三

炎天やまくらの中の露吟り　安房 桂山

大きなる月見る所て名残しも　上廿 由儀

家まて深印まつ家衣かれ　柏露

夏の家かりを春すれ木下やミ　景文

日の出やきはし舟窓のうれ吟　岌白

水もくれゆるともよ来りしも　下廿 西翁

夕そらに峰やきる姓の花まれ　可月

夏のしミや神窓やはまあす　旧人

花の威のあとを借なる牡丹三郎　九翁

まつ川かけるの底やきるの月　可候

花まれて月日のうつもさくら子　月杵

行燈のひと所難毛て夕納涼　嘉子

涼路ミ夏ハまちかり時は風　香以

鮮きさる八ちりまかる白魚哉　ムサシ 東皐

何多とき春白きれ栗の花　宅路

枯人の見ゆまりまる一神　石波

上廿四

ゆふ風にさそはれ出るや柳かげ　昇阿
明ぬるや人は[illegible]て月を見　琴玉
春は富士[illegible]はれは[illegible]　儀雲
蓬生[illegible]日も[illegible]て[illegible]　皆如
春の色桜の明て[illegible]　丈也
初雪や[illegible]　不語
梅の葉[illegible]　舞史
鶯[illegible]馬[illegible]川[illegible]　正竹

鶯の[illegible]風[illegible]　東道
若草[illegible]の[illegible]　脩古
梅の宿[illegible]　枇杷
山里や[illegible]の[illegible]白菜　三案
秋風や[illegible]山も[illegible]の業　春山
打[illegible]の[illegible]　鄉升
市[illegible]の[illegible]　福来升　未足

降る音のはまこもりたる庭の雨　子紀

帆は清く見えて沖を通りけり　松朗

雨あとの砂にすまひて蛍かな　笑隠

麦畑の中より出来て付るの風　時表

蟹這て走る音あり涼しい錦　瞻跡

霧はらす風あり渡る神路山　姑山

人家の中より出る宿の月　石塁

菊の香や夕暮秋は朱の蝶　遊山

柚咲て新田ニ家の出来にけり　卓郎

里ふりや垣の間の麦の花　凡外

色々て来る鷺の道あり菖蒲池　春游

蟹の穴ありけり行や雪の華　きく雄

萱草やまゝ庭の窓の内　思楽

刈草の匂ひや鍋のあるまく　芦齋

身の花を花まゝよせて長命寺　五休

花苔の松も見知らぬこゝろかな　古年
雨の音も風の吹かくす柳かな　卜早
人もなき空に霞のうつゝかな　総斎
梅は花香もしらぬ人もなき身の姉　鼓汀
又見るや戸口の建てる花ある子のつる　由地
あさ日や雪の筒のまゝあれ見る富　里木
花さりよ花も嬉し梅の花　茶民
静かなる子に作業に無事に祈　尋香

菖蒲さへ葉に香や乙鳥かな　寄泉
笠よりも竹は時雨のはし哉　三禾
見るや行方も絶えて花の風　其葉
月あかり花の間は静や水ぬるむ　庵民
唐土の鐘の声ある蔵まつり　之郎
暮月のおもてし中や庭掃除　謝葉
耳あるも水中から清きかな　可葉
松の露白しきせの花の影　和棣

鐘つけり江月ふたりにくれ経　成仙

加賀の国

霞の日に行く春の寺の鐘　白元

梅ちりて茶の味も出ぬ梅見の鐘　以守

小座敷の手まくら春の嫁の君　留我

茶の湯や月もよし野の藤の晦　芦葉

浅の裏や月かれる木の葉の色　木和

雪見よ弁天島の桜かな　宇山

虫の音も古郷あり萩の枯尾花　華光

岸は越路の夕浪も白し帆　如白

宿とりてさゝはげし鳴きし夕霞の丸　只青

雲の峰や海て稲より山つゞき　可笑

山吹や乾てあかし雪の道　桃止

花ちりて乱れ中なる衣の色　雪橋

降る日は濡れて更けるや秋の暮　冬月

秋もさびしき野路の芥子　幽止

いそかしく鶯古めしのこゑまおかしさ(?)

娘(?)まらん(?)人あるや浅草の花(?)まつり　梅表

鶯(?)そ鳴まなり(?)一羽まだ(?)障子(?)影　鯨自

ましく(?)露な古葉のあたらや志ぬ水　雪祢

一つ(?)やうの呼声は冬の哀(?)百舌鳥　山翁

定る(?)欲の出て黄なるを愛せずとまず　花丁め

雪翁や臆(?)しき書(?)山の新　通古

里(?)す子に鶏と云ふる渋(?)鶯ころ哉(?)　果人

井の水も浮(?)きてきや色のまぐ(?)　小雲

世(?)を守る(?)なき身先や初(?)ころ(?)　香陽

生垣の下は水(?)らは藤(?)の葉(?)　至隣

一つまとて河りても我ちる虫の宿　小霞

出来りて行く秋月日和ころ哉　禾暁

此(?)鳥はやぶるかる秋の風　尾正

木母寺

山鳩の鳴く宿は来て出(?)森(?)哉(?)　然平

笠ぬいて手に持かへて清水哉　風雅
さみだれのよきはらりや雲の岸　露山
山こえて里へ行見えて暑河原　松登
蚊の声は深き笹原に夜の月　子竹
橋まくや蓑のうへまでおく砌　呂風
手に染しも色清き世の夜の月　字友
萩の花の様姫もこぼる月日かな　青字
秋らしき徑の尾花しぼれ花　冰壺

たけや青田の寒さかな　鳥城
鳴やんで蛍の光や江の辺り　芳泉
水や祭まつりよ涌きる泉　庵悦
障子のあけや蚊遣の煙の末こ　露川
夕立や落てくるより船あかり　素舟
明近く茶の煙城の跡　石丈
風ふや梅よりうく様やかり　不酔
身にしむは風の中なる清水哉　永年

垂れ乱し梅一枝や池の中　乙云

遠望

白雲や秋月よかる筑波山　四端

春の雨眠気をもてしとみじかり　栢水

かくやわや柳をこえり波の上　一巷

立秋や自由ならぬ水の音　李池

揚られし凧の高さや月の星　蓋め

家毎や秋へ雲たる湯まぬの　文め

播くまる木株まではる清水哉　文昇

玄の風七一輿まおるきくらの面　唄之

涼し家や何や乞ふ持ち出し舟彼　龍壱

菜の明暮こゝや枝くらり　七峯

雉子啼や先啼の声ふ山　浪古

青ききし中る石やまもやあの山　る李

色も角も梅の香りまさる風哉　可晃

秋来るや下よる秋まる流れ哉　宮山

見てきいハまさかの桜の手折かれ　柳賀

遠山を出るの新月かな　こま雄

追加

京に竹ハ尽ても水の細かりかな　江廿之 蘭石

本風咲や道清水はりとかり　廿九三 卓雅

涼しさやみたらし見ぬたまり水　秋田 風柏

夕立やちりしまり舟ぞ　下廿 東舟

白芥子や見ぬうちに咲の上　可嘴

見るに月をしらずや猫の恋　五十コ 志扇

何事も心静かに暑さかな　十二八 笋也

藪蔭り梅蔭るのはつ花　百柳

嵜てまね橋のはるを乗の雛　文浙

庵枝もたきまのましく網代守　秀哉

かくれ家のよ経のこるや春の川　雲水　花園

個釜に汲ひとしと初あらし　佳節

夜の秋の岸を離るゝ筏の節　下井　庵芒

朝々やまるしはまる柳紅　ハリマ　松斎

昭和學園 短大 圖書 第6612號 受入 36.3.14